
c a r o m

冴島岐之

PDF小説ネット
Byウメ研究所
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

carom

【コード】

N1351D

【作者名】

冴島岐之

【あらすじ】

シリーズ。高校の軽音部『carom』のメンバーの日常を、淡々と綴ります。

ウタ唄いの憂鬱 * 1

「外さないでよ」

「わりイ、もっかい頼む」

毎月、第三日曜日はスタジオを借りてライブをやるうって決まってる。この三月も例外なく、明日の十八日にちゃんと予約してあった。

今月はみんなそれぞれ忙しくて、五人全員が集まって合わせるのにはこの前日しかない、なんて、なんだか危機感の感じる状況。新しい曲だって入れたし、久々にラストを演じられることになったから、みんないつもよりかなり必死になっている。

それなのに、あの男はまた同じところでコードを外す。そろそろ怒りの限界だ、と思う。

「まあまあ、カヅキ、そう怒んなくて」

中尾雄亮が間に入って私を宥めようとする。目の前で落ち着くようにって手でジェスチャー。顔には苦笑い。御機嫌取りのポーズ。そんなんでこの怒りが消えるんなら苦労しねーよ、という意味を込めて

「チッ」と舌打ちをした。

それからまたユースケを通してあいつを睨みつけながら、握ったマイクをどうやって頭に投げつけてやるうかって考えていた。

「腑抜け。ヤル気ないんだったらいらんから」

「うん、わりイ……」

ムカツク。こっち見て話せや。

口に出す前に一回、顔を大きく歪ませて睨むのが私が怒るときの癖だ。本日も例外なく、眉間に皺がよった。口は真一文字に閉じている。

あいつは、いつも前のめりになってギターを弾く。横目で見ながら、いつかそのまま前転でもするんじゃないかって思うくらい、夢中になってギターを弾いている。

なのに今は、申し訳程度に首からストラップをかけて、手を添えただけみたいに頼りなくギターを持って、明らかに落ち込みから背中がかくりと曲がっている。情けない。かっこわりイ。

そんなの、あいつらしくない。

「なんなのあんた、そんなにギター楽しくないわけ？ それともこんなことやっつてんのバカらしくなっちゃった？ どっちにしるその態度、マジムカツクんですけど。あんたが誰にフラれようがフろうが裏切られようが、こっちは知ったこっちゃないんだよね。その雰囲気、ここに持ち込まないでくれない？」

うつかりでもなんでもなく、ズバズバといつもの調子で口を滑らす。いつもだっいたらあいつに『かわいくねえ』って毒づかれるところ。でも今日は、

「なによ」

「あー、あー、俺が悪うゴザイマシタっ！ 帰るわ」

「はあ？ 何それ」

「だって俺がいないほうがいいだろ、じゃーな」

驚くほどの速さで帰り支度をして、あいつはスタジオから出て行った。アリエナイ。マジでアリエナイ。あいつホント、イかれちゃったんじゃないの？

乱暴に閉められた扉の内側で、沈黙が広がる。

「カーツキイ、マサト怒っちゃったじゃんか」

「私のせいだっていいたいの、シユン」

ドラムの賀庄峻一が、手にしたスティックをくるくると回しながら、不満そうに口を尖らせた。こいつはとかく軽い。ぺらぺらぺら喋る。いうなといった話を誰にも喋らないでいられた試しがない。もちろん女の子に対してもそんな感じらしい。できたらこんな知り合いは欲しくない。

「そういうわけじゃないけどさー、もちっと言いつてもんがあるんじゃないの？」

「は、言い方ね」

あたしゃあんたのその口も気に入らんよ。うるっせーんだ。

シユンとは小学生の頃からの付き合いだ。幼馴染とは違うが、小中高と同じ学校に通う仲。それでも未だにこいつは、私の考えることってのがわかっていないらしい。

「イーじゃん、カヅキは間違ってるじゃない。いつてくれて俺はすつきりしてんぜ」

「ジュンタまで……まあ、確かにあいつもあいつだけだよ」

私とシユンが喋っている背後で、時任潤はアンプの前にしゃがみこんで手を動かしている。どうやらコードを外そうとしているらしい。

「ジュンタア？ 帰んのか」

「だってこれじゃ今までの練習と変わりないだろ。合わせらんないんじゃない意味ねーよ。カヅキ、お前も」

コードから解放されたベースを持って余しながらゆっくり視線を私に向けてきた。カラーコンタクトを入れているジュンタの目は灰色をしている。ロン毛とはいえないまでも、肩口まで伸びた漆黒の髪が、遠慮がちに揺れた。

「はやく、行くよ」

「……うん」

またやっちゃった。ジュンタを見ると、なんかもう全部を忘れちゃう。ジュンタの全部が私を魅了して、魅惑して、感じ取る以外の全ての行為を忘れそうになる。ヘンな感じ。

「あらー、どうするユースケ。カヅキとジュンタはデートらしいよ」

「みただいねー、シユン。まったく、ノンキだなー」

「なんじゃねーよ」

くくつとジュンタが濁いた笑いをこぼして、去り際に私の耳元で「いつものとこ」とだけささやいて出て行った。背筋がぞくぞくとふるえる。敵わない、と思う。

今日はほとんど役目のなかったキーボードを片付けていると、うしろでシユンとユースケがまた喋っていた。

「なんでジュンタってカヅキなんだろう」

「だよな。カヅキかわいくねーし、ジュンタは前みたいな年上のお姉様の方が似合うよな」

「そうそう、カヅキって色気の欠片もねーよな」

「……あんたらねえ」

普通本人の前でそういうことというか？ ホント、こいつらの感覚が掴めない。

「大体ジュンタは私のことなんて好きじゃないよ」

私だって別に好きなわけじゃない。一方的に憧れてるだけなんだから。同い年なのに、どうやったらあんな落ち着いた雰囲気が出るんだろう。思ったことをすぐ口に出さないで、感情に振り回されないで。

私とは逆だ。人生を道に例えたら、物事に対する考え方や捉え方を方向で表すなら、私とジュンタはきつと正反対の方向を向いてい

るだろう、と思う。

「じゃあ、明日ね」

「おー、最悪四人でだな」

シュンはおもしろそうに笑ってるけど、ユースケは私を睨んで手を振っていた。あいつが出て行ったのは、私のせいだといいたいのだろう。否定するわけじゃないけど。

ウタ唄いの憂鬱 * 2

薄暗い階段を上って地上へ出る。まだ昼時だ。眩しさに目がちかちかして痛い。

『いつものとこ』

そういつてジュンタは先に出て行った。多分、スタバだろう。ジュンタは無類のコーヒー好きで、中でもスタバが一番のお気に入りらしいから。

駅前にあるスタバへ行くと、ジュンタはいつも通り窓際のテーブル席に座っていた。さっきまで見ていたその姿を見つけて、私は思わず固まった。

あいつがいる。

私は咄嗟に帰ろうと決意したが、が、そう思って目を逸らそうとしたところで、ばっちりジュンタと目が合う。

ジュンタは微笑んでいたけれど、灰色の目は笑っていなかった。帰ろうとしたことがばれてしまったようだ。

仕方なく、私は店内へ足を踏み入れる。なんか買ってからこいとジュンタにジェスチャーで示され、しびしびレジに並んだ。いつもと同じキャラメルマキアートを頼んで、ジュンタとマサトが待つ席へ近づく。

「カツキ、ここ座って」

そういつてジュンタは椅子を引いてくれた。

「ありがとう」と小さくいつて、カップを先にテーブルへ置く。それ

から背負いっぱなしだったキーボードを肩から外して、自分が座る椅子へ立てかけるようにして置いた。

「マサト、お前、まーたやってくれたなあ」

「……かもな」

「そろそろいつてもいいんじゃないの？」

イヤな無言がマサトを中心に生まれる。私は逃げ出したい気分になる。イヤだ。どうして私、ジュンタのいう通りにこんなところへ来たのだろう。やっぱりあのまま帰っておけばよかったのだ。

今さら遅い、だけどまた、マサトの失恋話聞かされるくらいなら。

「あ」

「あのさ、」

マサトがいいかけたところで、私は遮るような大きな声を出した。

「いい加減、そんな話聞きたくねーし、イチイチくよくよされてちやたまんねーし、私、そういうのジュンタ達みたいに耐えらんねーんだよね。だからさ、」

ヤバイ、心臓がめっちゃめっちゃだ。うっさいよ、静まれってんだ。

あー、音が聞こえない。

「明日で、も、止めていいかな」

ごめん、頭の中で謝罪の言葉が響く。本当はこんなこと理由にす

る気持ちなんてこれっぽっちもなかった、でもそろそろ限界なんだ。何が、そんなのわからない。だけど限界なのだ。

音楽、こいつらでやるバンドは、なんだかんだいって悪くない。むしろめっちゃくちゃ良かった。

知らない大勢の人の前で唄うのが、気持ちよかった。

だけど、自分がおかしくなりそうなんだ。

イライラして、だけど驚くくらいに高揚して、でも胸が痛くて。きつとスポットライトが私をおかしくしてる。歓声も拍手も聞こえない、ステージの上、ギターを掻き鳴らすあの指が、飛び散る汗が、私をおかしくするから。

もう、見ていられない。胸が痛い、その理由も、本当の本当は気付いているから。

「私いない方がみんな、やりやすいっしょ」

確信も事実もここにある。何より、私は耐えられない。

「ま、マサトの話聞けよ、カヅキ」

そういつてジュンタは私の頭をなでた。

ジュンタはこういうことを自然に、誰にでもやるからいけない。

干渉し過ぎないやさしさは心地よくて、無条件でドキドキさせられる、自分が女の子なのだど気付かせるような、守られているような、不思議な気分になる。

「……俺、」

マサトはいつもと全然違う、しおらしくなって、伏し目がちになる。何かいぶかしく感じ、ジュンタの方を盗み見ると、私がそうするとわかっていたのかばっちりと目があった。さらにそこには、め

つたに見せないやわらかい笑顔を浮かべている。だからヤバいつて。自分の中の女の子が簡単に顔を出しちまうから。

「つ、ジュンタ」

「く、わあつたよ」

ジュンタはまだ中身の入ったカップを手に持って、私の方に手を置き

「カヅキ、明日ね」と唇を耳にくっつけるようにささやいて席から離れていった。

ああ、まただ。

心臓は正直にその鼓動を速めてしまう。

「……カヅキ？」

「なにさ」

長すぎず短すぎずの茶髪。耳にあけたピアスが髪の間から見え隠れする。

軽音部で初めて会って、もうすぐ一年になる。その間、いつだってコイツの中にはあの女の子がいて、他の子からの告白だって取り持った。

意味が、わからない。マサトのどこが女の子にもてるんだろうか。やっぱり、ギターを弾いているから？ バンドやってるともてるっていうらしいけど。確かに、ウチのバンドの奴らは全員が彼女持ちってわけじゃないけど、彼女が欲しくて悩んでるなんて聞いたことがない。

ああ、私も、彼氏がいたら何か変わるかな。なんか、惨めになっ
てくんだ。バンドを無くした私って、さらに。

「……スキ、なんだけど」

スキ、好きねえ。またマサトの恋愛相談でも聞かなきゃいけないのかね、私は。私は、誰かを好きになれるのかね。

ここで、このバンドで過ごしてきた以上に楽しいことなんて、あるのかね。

「ふーん、今度は誰よ」

「……お前、それ本気でいつてんの？」

「は？」

なんか聞き逃したかな、としばらく考えてみる。考えゴトはしていたが、話はきちんと聞いていたつもりだ。誰か、なんてマサトはいつてないし、誰かを指し示すようなこともしていない。私がいて、マサトがいて、『スキ、なんだけど』そういった。でも、そんなのつて、

「何、私が好きだともゆーの？」

まさかね。思いながら口に出してみる。

「それ以外何があんだよ」

「は？」

嘘だ、信じらんない。心底呆れた声が口から出る。

私は自慢じゃないが、今まで一度だってそんなこと、所謂告白な

んでされたことがない。口だって悪い。

私はマサトがカワイイと口にする女の子のような、一般的な女子にはまるような格好も口調も仕種も、何もできない。

私とマサトはバンド仲間で、私の一番の喧嘩相手で。

「アリエナイ、脳みそ溶けちまったんじゃねーの」

「はぁ……いいよ。今はそれで」

「　　った」

視線を下げたマサトを不思議に思っで見つめていたら、マサトが顔をあげたのと同時にでこピンをくらった。意外に痛いんだ、これ。

「今日は、悪かったよ。やめるなんていうな、caromのボーカ
ルはお前だけなんだから」

痛くて顔をしかめる私を見て、マサトは久しぶりに笑った。

その笑顔に、いつものマサトに戻ったのか、と少しだけ泣きそうになったことは、悔しいから絶対に教えてやらない。

「 E N D 」

卒業ライブ

「ねえ、ジュンタ」

「なあに、カツキ」

しゃべりかけて、また口を閉じる。最近のカツキはそういうおかしな態度ばかりだ。原因は、わかっているけれど。

でもだから、ちょっといじめてやりたくなるんだ。

「また、マサトのこと？」

そう、耳元でささやいてみる。できるだけ唇を近づけて。

最近カツキは髪を染めた。以前は綺麗な黒髪だったのだが、少し青くなっている。腰を覆うほど長く、きっちりそろえられた毛先。

ライブの時だけつける、真っ白なエクステが、俺は好き。今日もつけている。俺はそれを、指先ですくう。

もともと同じ学校の軽音部から始まった俺たちは、先輩たちのため、今日四月二十八日、毎年恒例の卒業ライブで、学校近くのスタジオを貸切にした。

今は長机や椅子を並べて、ライブ中なのに打ち上げ状態だ。飲み食いがメインなのか、演奏を聞くのがメインなのか、わかりやしない。

卒業ライブとはいっても、要するに部活から引退するだけで、完全に音楽から離れる人もいればもっと本格的にやろうって人もいる。だから、こんなのは騒ぎたいがための口実に過ぎないのだ。

会場のはしっこで傍観していたカツキを見つけて、先輩たちから

うまく逃れてとなり座つたのはほんの五分前。

すでにジューズで酔っているらしい。

雰囲気、というべきか。

カヅキは一度上目遣いに俺を見上げると、また視線を落とした。

「アイツ、よくわかんない……」

ぶすつと口をとがらせるカヅキの姿に、俺はくすくすと控えめに笑う。

「またケンカ？」

「今度のはちょーつとちがうっ」

「どくらへんが」

「……いつもの三割増しってカンジ」

それじゃ大したことないな、カヅキの髪に指を通しながら、横目でマサトの姿を探した。またアヤノ先輩に捕まってる。すごい形相で俺のことを睨みつけながら。

やだやだ、嫉妬って。

そう思いながらも、俺はカヅキに近づく。形のいい小さな頭を包むように手をまわす。そうしてまた耳元へ唇を寄せる。

「アヤノ先輩、まだマサトにぞっこんだねえ」

俺がそういうと、カヅキはがくんとうなだれた。三割増しは嘘じゃないらしい。

「……なんかね」

一度困ったように視線を床で泳がせ、コーラが半分くらい入っていた紙コップの中身を一気に飲み干した。こいつに酒飲ませたら、悪酔いしそうだな、と思う。

「話すなって、特にジュンタとは。半径五メートル以内に近づけるとかいつてんだよ、バカみたい」

「へえ、じゃあ駄目じゃん。逃げとかなくていいの？」

「別に、意味ないし。いちいちアイツのいうことなんて聞いてらんないよ」

バカにしたようなその言い方に、マサトも気の毒だなと、苦笑いを浮かべた。

でもカヅキに限って、誰かのいったことを素直に聞いて、まして実行するなんて到底思えない。それがカヅキが正しいと判断することでない限り、あり得ないのだ。

この一年間、一緒に演奏して、唄って、ステージで同じスポットライトを浴びてきた、俺たちはそれをよく知っている。

「男はみんな狼なんだ」とかいつてんの？」

「そうそう、ホント、バカみたい……」

「でも、あんまり無防備にしていると、俺だって襲つかもよ？」

俺がちよっと動けば、キスができるくらい近い。

やわらかそうな白い肌。ふっくらしてうるおいのある唇。

マサトはもう、触れたのだろうか。

「へ、やれるもんならやってみな」

相変わらずだ、俺はやっぱり苦笑いする。

カヅキは誰かと付き合っていたって、全然変わらない。たまに女になるけど、いや、女にさせるけど、それでもたとえばファッションとか、（もともとカヅキとマサトの趣味は似てるけど）付き合いが悪くなったりとか、そういうことはない。デート（つまり二人で出かけること）に誘えば今だって、遠慮することなく付き合ってくれる。

まあ、そこがマサトにはおもしろくないんだろう。

とりあえず、まだ殴られてはいない。

「お二人さーん、飲んでるかいっ」

三月でまだまだ寒いはずなのに、半袖の白いＴシャツを着た男が近づいてきた。ネルシャツを腰に巻いて、下は着古したジーパン。片手に紙コップと、ペットボトルが二、三本。

「シユンじゃん、ちようどいい。なんかジュースちよーだい。炭酸じゃないの」

カヅキは空になった紙コップを差し出して、早くつげといわんばかりにぐらりと円を描きながらコップを回している。

「あー、オレンジしかねーよ？」

さすがはうちの歌姫だ。

すっかりいいなりのシユン（カヅキがいうには、昔からそうらしい）は、ゴトンと持っていたペットボトルを置くと、ミラーボールとスポットライトくらいしか光源がなくて薄暗い中、目を細めてラベルを読んでいる。

「それでいーよ。さっさとついで」

「へいへい。つたく、ジュンタは？」

「ミツヤサイダー飲みたい」

「あ、残念！ 売り切れでーすっ」

「んだよ、じゃあ同じでいーよ」

ステージでは今、三組目のバンドにバトタッチしているところらしい。内輪のライブだけあって、楽屋は未使用。演奏者もフロアから上がるっていう適当さ。

「いっちゃ悪いけど、本番はまだまだだ。」

うちの部活は大所帯だけに、当たり前外れが激しい。実力のある奴となん奴の差が、それほどはつきりしている。

今日の主役、先輩たちで構成されたバンドは全部で四組あって、当たりはそのうちの二組だけ。いっちゃ悪いが、それ以外なら俺の方が実力は上だと思う。

ちなみに今も匡人を放さないアヤノ先輩は、我等が部長だったりする。ベーシスト、なかなかの腕前。入りたての頃は結構世話になった。

「つまんねーなあ」

がたんとでかい音を立ててシユンが俺の隣のパイプ椅子に腰をおろした。

「ああ、つまんねえ」

「あ、あれおいしそう」

「どれ？」

「ジュンタの目の前にあるヤツ、バターしょうゆ？ 新商品じゃん」

「あー、はいよ」

「あんがと」

カヅキは満足そうにスナック菓子の袋を抱える。一人で食べるらしい。他の女の子だったら体重がどうのとかいって気にするところだが、そういうえばカヅキはそういうことを気にしている素振りを見せたことがない。

「んー、うまっ」

「あ、ついに来たぜ、本命」

carom

アヤノ先輩たちがステージに上がった。まともな目を向けると、ステージってのは結構眩しい。

「　　イイ声だなあ」

「ギターも最高」

「は、ドラムは俺のほうがうめーな」

「バーカ、自意識過剰ってんだよ、それ」

「シユンがナルシイなのは今に始まったことじゃないし」

「うっせ、事実だからって負け惜しみいってんじゃねー」

「負け惜しみじゃねーし」

あははと三人ともが声を上げて笑った。居心地のいい空間。いい音楽。

「おいつ、黒髪少年！」

「お、マサトじゃーん」

後ろから怒鳴っている訳ではないが最大限まで低めた声に殺気めいた気配を感じた。振り向くと睨まれた。そいつの出現に対し、シユンが陽気に応える。

「少年って、俺か？」

「カツキに触んな」

アヤノ先輩が出番でようやく解放され、俺に文句をいいにとんで

きたと。まったく、らしいよ。その余裕のなさ加減。
睨みつけるマサトの目を見ながら、俺はやっぱりくすくすと笑っ
た。

「カヅキも、ジュンタは駄目だっつーの！」

「っさいなー、イイじゃん別に」

「よくねえっ」

「嫉妬する男はみにくいよーん」

「シユンは黙ってる！」

シユンはやにやと笑いながら一応口を閉じた。カヅキはイラつ
ているらしく、こっちもこっちですごい形相でマサトのことを睨
みつけている。

気がついたら口喧嘩の始まり。

「んでおめーはいうこと聞かねんだよっ」

「んであたしがあんだのいうこと聞かなきゃいけないんだよ」

「お前は俺のだろ！」

「何バカいつてんの？ マジうざい」

束縛したがるマサト。というより、カヅキがそういうことに疎す
ぎて心配なんだろう。わからなくもない。

微笑ましく思って、二人の言い合う姿を見ながら、少し羨ましく

なった。

「かわいいーねえ。シユンくん、そう思わない？」

「うんうん、かわいいーねえ」

うちの歌姫はかわいい顔をしているが口は悪い。白い肌、赤い唇。

「えっ」

「ああっ！」

シユンがひゅうつと口笛を吹いた。思った通りやわらかいカツキの頬。

「もぉ、いきなり何よ」

動じないカツキ。それに対してマサトはといたら、言葉もないといった様でパクパクと口を開けている。

ああ、この二人、おもしろいよなあ。

「俺も彼女作ろうかね」

殴られないうちに、逃げておこつ。シユンの襟を掴んで、眩しいステージへ向かった。

＝END＝

carom * 唄

たとえばそれは、誰かのタメだったのかもしれない。

熱気のせいか、さっきまで卒業ライブで貸し切っていたスタジオは少しだけ息苦しかった。

先程からのマサトとの言い合いにもうんざりして、ウザッたくて逃げ出した。アヤノ先輩が来てちょうどマサトを捕まえてくれたおかげで、誰もついてはこなかった。

誰もいない楽屋がいくつか並ぶ狭い廊下、少し暗い照明が照らし出す。既にラストライブは終わった、後は飲んだり食べたりの宴会だ、興味ない。

それよりも、だ。誰かが唄っている。控え目なギターを奏でながら。

キレイな声だ、こんな奴今まで知らなかったな。惹かれるままに音がもれる一室を覗いた。元からきちんと閉まっていなかったドアの隙間から、バレねえだろうな、なんて少しドキドキした。

キレイな声、メロディはどこか落ち着いたやさしい響き、なんだ、アイツか。

ドキドキする心臓でリズムを取る、それからアイツが唄い終わるまで、私は楽屋の外でその曲に耳をすませていた。

夢を見たんだ 人形の
ぼくらはいつしか 見えなくなる
その前にひとつ 話し掛けてやらないか
いつだって 待ってたんだ
はちきれそうな孤独抱えて

さあ騒ごうぜ 月が満ちるまで
ぼくらは いつだって 夢みがち
あの子にも おすそ分け
目を閉じたら 唄いだすから

少し泣いて 自転車とばそう
風が強い 景色が吹っ飛んでく
弾けとんだ 水分子
置いてった 声も
今あるものを 抱き締めてやれ

さあ騒ごうぜ この夜が明けるまで
ぼくらは いつだって 夢みがち
待ってたんだって
目を閉じたら 唄いだすから
ほら 待ってたんだって
あの子にも おすそ分け
目を閉じて 唄いだすから

ぼくらは いつだってそう
いつだって 唄ってる

ひしめきあう ガラクタ

carom

忘れられた人形劇
終わる前に ひとつ 変わったこと
わからないまま
いつまでも 待っている

壊さない

「お前、そういうのいつ考えるワケ？」

「電車ん中」

「はあ？　いつつ俺とダベってんじゃん！」

「そんな重要なコト話してたっけ？」

あっけらかんと、カヅキはいった。これっぽっちも悪いと思っ
ないみたいにいるから、毒気を抜かれちまう。

「んだよ、ひでえな」

「もう、シユンはいいから。で、感想は？」

それなりに広いスタジオの端っこで、小さく円になっている俺ら。
一見したら何やってんだって感じだけど、今はカヅキが新曲を披露
中。だから、一応真面目にやってるワケ。一応。

俺たちの中で、だいたい役割分担は決まってる。たとえば曲作
ったり、詞を書いたり、ライブを取り付けたり、だ。けど、最近
はみんな関係なく曲を作ってくる。

元々作曲は俺とジュンタで代わる代わる、もちろん相談しながら
二人で作ったりもしてた。今はとにかく、曲を作る人っていう境界
線が曖昧過ぎてる。

もちろん、全ての曲が使われてるワケじゃねえし、まだまだ作曲
が不慣れな俺等はすぐに何曲と作れるワケもなく、常に試行錯誤だ

から自作の曲がやたら多いなんてコトもない。

詞にメロディをつけるにしろ、メロディに詞をつけるにしろ、人前でそれなりに演奏できるくらいに仕上げるのはなかなかムズカシイ。不向きなのかもしれない、と何度思ったか。その度に知識や経験不足だからなんだと言いつけさせてきた。

そういえば、そんな中でも詞をつけるのは、カヅキだけだった。

「イイと思うけど、」

「なんか、らしいよ。caromっぽい」

「なんだそれ」

俺も特にいうことはないので、とりあえず黙ってみる。

文句をつけたところで作れないしな。詞ばかりは。なんか、恥ずかしさに加えて、どうやって詞を書くのかわからねえんだ。何を詞にするのか、思い付きもしない。カヅキが気に入らなきゃ、容赦なく却下されるだろうし。

「……ユースケ？」

今回もいつも通り、このまま練習かなあと思っていたら、カヅキが思いつきり眉を寄せてユースケを睨んでいた。

そういえば、今日はずっとだんまりだ。今も、目がものすごく泳いでいる気がする。でもそれもすぐに真下を向いちまったから、わからなくなった。

「あ……」

「ごめんって、聞いてなかったワケ？」

あーあ、カツキが怒ってる。そりゃそうだよな。

「ユースケえ？ お前、どうしたのさ」

俺はこっそり下から覗き込むようにユースケの顔を見た。それでも顔がよく見えない。どうしたんだ、マジで。

「つか、いつつ俺に『ちゃんと聞いてるよな！』って怒る立場のくせに。」

「悪い、いや、違うんだ、聞いてなかったとかじゃなくて、違うんだ。カツキ……」

ユースケは両手で頭を抱え出した。すっげーため息だな。どうしたんだ、真面目眼鏡のくせに、妙にしんみりしちゃって。

「いいよ、イヤなら。いつてくれればいい」

「だからそういっじゃないって、その、」

「さっさといえよ」

おっとおっとおっとおっ？

もしかユースケさん恋の予感？ 妙に顔が赤いんですけど。

でもなあ、かわいいそうだけど、カツキはマサトっていうか、マサトがカツキだからなあ。あと、ジュンタも怪しいし。この間ほっぺにちゅうしてたし。波乱じゃん、ユースケ！ なになにに、修羅場？ つか、カツキにモテ期到来？ まあ、俺はそんなに流されねえケド。

「うへ、興奮する!」

「……黙れよ、シユン」

「きもいぞ……」

「吐け、ユースケ! なにがあつた!」

「やっべーやっべー、マジ興奮する! 人の恋路はどうしてこうも楽しいかね。」

「……シユン、顔にいろいろ書いてあるぞ」

「もうジユンちゃん! 俺どんな顔してる?」

「すっげー楽しそう」

「あらら、当たってるし。そういうジユンタも、若干楽しそうだけどね。」

「ホント、なんでもない。今回の曲もよかつたんじゃないの。ただちよつと、良すぎて酔つたつーか……とにかく! 聞いてなかった訳じゃないっ」

「なに……それ」

カツキは目を丸くして、ユースケを見てる。いや、俺たちみんな、びっくりしてユースケを見てるんだけど。

ユースケがこんなに自分の感情 音楽のことで 出したの、初めてかもしれない。真面目なまとめ役の眼鏡くんは、いつだって

損な役回りで怒ってばっか。

きつと人生の八割を他人のコトで余計な心配とかして、苦勞するタイプつつうのが俺とマサトの一致した見解。まあ、外れちゃいなと思う。

「やめろ、見るなお前ら。全員文句なしだろ？ 次のときまでに自分のとこのアレンジまでやっとけよ。ほら、やるぞ、練習」

ひとりユースケは円から外れ、自分のギターを引っ張る。真っ赤なギター。

こっそりカヅキの顔を見ると、ほんのり頬が赤かった。どんな風に褒めたって絶対に照れないカヅキがこんなに揺れてるのは、多分、あれだ。

こいつにとっては唄うのが一番だったこと。

今度はこっそりマサトの顔を見る。こっちは対照的に、青い。真っ青。カヅキの顔を凝視してるや。

こりゃ、一波乱あるのかね。

「あれ、やるうぜ」

どうやら我らがリーダーは、恋愛事に疎いらしい。とはいっても、カヅキの次だけど。

「いいなあ、やるか」

「久しぶり」

「ちょ、待て、ユースケ。じっくり話したいことが」

「あと。お金払ってんだから。やるつついたらやる。おつちと用意しな」

まあ、どうなったっていいんだけど。

そんなんで俺らは壊れたりしないから。

そんなんで壊れるなんて、俺がさせない。

「シユン、合図」

唄い続ける限り、俺らはつながっているから。

＝END＝

メロディメイカー

たまに、考えてしまう。

俺は、ここにいていいのか。いる意味、あるのか。

そうやって自問自答して、しゃべるのが怖くなるんだ。ギターを持つ手が、ふるえるときだってある。

俺のポジションって、他の誰でも代えがきくんじゃねえかって。そう思うと、怖いんだ。

「新しいの、できた、ケド」

上邨桂月。ボーカル、たまにキーボード。

「お、カヅキちゃん仕事はっやーいっ」

賀庄峻一。ドラム。盛り上げ役。

「へえ……今回の曲、誰だったっけ？」

時任潤。ベース。客寄せ。

「そーいや、新曲作るなんて聞いてねーぞ」

遠山匡人。ギター。アレンジ好き。

「俺がいったんだ、そろそろなんか作らないかって。今回はカヅキがやったのか？」

そして俺、中尾雄亮。ギター。

「まあ……そんなとこ。どうする?」

「どうするって、そりゃやっぱ聞くつしよ! なあ、ユースケ?」

シユンが嬉しそうに笑う。こいつはホント、好きだよなあ、音楽が。俺は曖昧に、返事をした。ああとか、うんとか、肯定に聞こえるだろう返事。

確かに、カツキにそろそろ作りたいたいよなっていったのは俺だ。でもそれはただの願望で、作ろうっていつものようにみんなで決めたわけじゃない。だから、俺も誰が曲つけたのかはさっぱりわからない。まあ、詞がカツキであることは確かだ。

「じゃあ、とりあえずカツキ、よろしく」

ジュンタがにこりと笑いかけた。それを不機嫌そうに見ているマサト。今は練習中だから一応自制しているようだが、醜い嫉妬心は充分見えている。ため息。

「じゃあ、うん。唄うね。あ、ギター貸して」

はい、と差し出された手。俺はその手に、戸惑う。

カツキは新曲を唄う時、なぜかギターを手にする。多分、こいつの場合はキーボードを出すのが面倒なのだ。いつも大して使っていないので、ケースに入った状態の方が多く、大抵は部屋に置きっぱなしだ。今回のスタジオ練習でも、使わないといったから持ってきていないようだ。

そういつどうしようもないワケでのギター、いつもはマサトに借りているが、今回はなぜか、その手が俺に向かっていた。

驚いた、が、特に拒否する理由もない。多分、興味。俺のギターを触ってみたいとでも思っているのだろう。

深い意味なんて、あるわけないんだ。俺はカツキにギターを渡す。赤い、赤いギター。

「じゃあ、唄うよ」

細い指が、弦の上で泳ぐ。

少し、たどたどしく、コードを押さえる。

流れ出す、メロディー。

「っ！」

心臓が止まるかと思った。実際、三秒くらいは止まっていたかもしれない。

心臓に氷でも触れたみたいに、本当に、それくらいびびった。メロディーが聞こえてから、カツキが唄ってから。

これは俺が、いつか捨てた。

その後は、取り繕うのが大変だった。

恥ずかしさで体温は上がりっぱなしだし、シユンは変な誤解しやがるし、マサトはマサトで

「違うよなっ、違うよな!？」とかいつてがたがた身体を揺さぶってくるし、ホント、死ぬかと思った。

まさか、あんなところでカツキに喧嘩は売れない。問い詰められない、本当のことなんて、あいつらに教えられない。

熱くて熱くて、汗までかいて、シャツがぺたりと身体に張り付いてくる。でも、不思議と居心地悪さは感じなかった。頭がまだ、ぐるぐるしやがる。

「カヅキ、」

一通りの練習を終えて、スタジオから出た。みんなで駅へ向かう途中、後ろの方を歩いていたカヅキにこっそり声をかける。

「なに」

「お前、見てただろ」

「うん、見た。ついでに聞いた」

ため息。カヅキがさりげなく出した手には、いつも使っている小型のレコーダー。塾の授業を録音してこいと、親が買ったらしい。カヅキが本当に使ってるのかは不明だが。やっぱり、こいつには敵わない。

「ユースケ、いい声してるよね、やっぱ。今度チェンジしようよ」

あたしがギターであんたがボーカル。

そういつて指差しながら、カヅキが笑った。こいつは、とんだ女だ。

「遠慮するよ。あれはもう、お前んだ」

少しだけアレンジされた、俺の曲。カヅキが唄いやすいメロディ

に、詩に変えたのだろう。それは、俺が当初創ったものより断然良くなっていた。後でそれをいうと、創れば慣れるものだといわれた。

「ちげーよ、carromのだ」

だって、みんないいっていったし。うちの曲でしょ。

無意識にそういつてるなら、やっぱりお前はすげー女だよ。

ちょっと、泣きそうになったじゃんか。

「ねえホント、今度ボーカルやってよ。もっかい聞きてーもん」

いつも、怖かったんだ。

俺には音楽の才能なんてない。

でも、あいつらは違うんだ。なにかが、違うんだ、決定的に。なのになんで、俺はここにいるのかって。

代えのきく俺が、どうしてバンドなんかやってんだらうって。

別に、俺たちはプロを目指してるつもりなんてない。

でも、やっぱり少しは夢を見る。この道で、一生。

浅はかだって、わかってんだ。

だから、怖いんだ。

いつ、いらないうっていわれるか、俺は、怖かったんだ。

「……それも、おもしろいかもな」

ただ、音楽が好き。

今はそれで、それだけで、ここにいるには充分な理由。

＝ END ＝

ラーク

その反抗的な目を、真っ直ぐ見返せないのがイヤだった。最初は、最初の理由は、きっとそれだけだった。 たった、それだけだったんだ。

「カヅキ、ここの音、おかしくないか？」

「イヤ、いんだってこれで。ここは外れてる方が響く」

「そ？ 違和感ない？」

「イヤ、一回通してみればわかるから。ね、マサト」

「あ？ あ、ああ……」

「どうしたのー？ ぼーっとしちやってさあ」

わざわざ腰を屈め、シュンが俺の顔を覗き込んできた。いきなりのドアップに

「うわ、」驚いて一歩ひいた。

「んだよ、俺傷つくー」

シュンは眉を寄せ、唇をとがらせた。俺より五センチくらい背が高いくせに、しかも男のくせに、背中を丸めて上目遣い。そんで確実にわざとだ。

でもそこがシュンの憎めないところで、なんでも女の子には『カワイイ』と、ウケているらしい。でも、俺は特にイイ気持ちはしな

い。男だし、当たり前か。

「まあ、とりあえず一回やるか」

はあ、と大きさに息を吐きながらユースケが仕切る。ばらばらと楽器を手にとつて、お互いの顔を見ながら円になるように立った。

雨のせいか、今日はやたらとテンションが低い。

軽音部の練習場所、いわゆる部室棟はみんなそうなのだが、いつもいる校舎からは離れた位置にある。おかげで楽器は濡れるし、この間っからカヅキとユースケはやたらと仲良くなってるし、なんかもう、イタイ。

それでも練習はやるケド。

マイクスタンドをカヅキがその両手で掴む。みんながシンヘ目配せする。シユンは、カヅキを見る。

カッ・カッ・カッ・ダツダダン！

スネアドラムが鳴いた、ギター、ベース、カヅキがシャウトする。すべてが気持ちよ過ぎるほどにぴたりと揃って、音は走り出した。

その唄い方、お前はどこで覚えてきたんだ？

乱暴な感じがするのに、勢いませで走っているような気がするのに、どこかで繋がっている。それはひとつの曲だからか？ 楽譜にはこんなこと書いてない。

同じ曲を作り上げてんだって、実感する。

ああ、だけど 息切れしそうなんだ。

「つ、いた」

「マサト？」

なんだってんだ畜生。今日は何もかもうまく行く気がしねえ。

「弦切れたっ」

「あ、ホントだー。だいじょーぶ？」

ただ、切れたただけだ。そういえば、張り替えるの忘れてたな。もう二カ月は経ってたかも。今さら思い出したっておせえんだよ、と自分に向かって毒づく。

イライラした気持ちを抑えるように息を吐く。右の手の平に、痛みとは違う、何かが這うような感覚がした。

「あ、」

「血？ って、マサト、大丈夫か？」

なんで血が、そう思って昨日の授業中に、誤って刃の出たカッターを思いつきり握ってしまったことを思い出した。ここ最近、ぼつつとしていると何度いわれただろう。弦が切れたときに、ちょうど傷口を刺激したのだろう。

それは小さい傷の割りには深く、流れ出した血はなかなか止まらなかった。一時間くらい抑えてやっと止めたのに、またこれですばらく血が止まらないんだろうか。

「ばーか」

「うっせ」

いつも通りにカヅキは冷たい。

別にやさしくしてもらおうなんて思ったことはない、期待なんてしてゐるわけがない。

俺も俺でいつものようにつつけんどんな返事をする。その後、カヅキが俺の視界から消えた。正確には、どこかへ歩いていっただけだが。

「はあ、マジ悪い。止めちまって」

「別にイイけど、お前が弦切るところ久しぶりに見たな。中学以来じやん？」

「自分の楽器くらい自分で管理しろよな」

背後からカヅキの声。いつの間に、振り返ったらまた、あの真っ直ぐな目で睨まれた。俺が悪い、カヅキのいってることは正論。だから目を逸らしちまう。思わず、だ。

「手、」

「は？」

突然の単語に、俺は間抜けな返事を返す。一瞬なんのことだかわからなくて、それが体の『手』だと気付くために、次のカヅキの言葉が必要だった。

「手、出せつつつてんの」

訳のわからないまま、いわれた通りにカヅキが顎をしゃくって示した右手を出した。小さい傷口と、それに見合わない量の血。結構流れてんな、そう思ったらふわりと覆った淡い黄色のハンカチ。

「ちょ、これっ」

「うっさい、黙ってる」

端と端が俺の手の甲で結ばれて、俺は右手を解放された。

「ユースケ、あれやろ。今日の練習は中断」

「え、でもあれは、」

「イイよもう。どうせこいつのギターダメだもん。チェンジ。マサトはそのケースの、シヨッキングなピンクのギター使え。弾けんだろ？ ユースケ、貸して」

どうせ010の方があんたは好きでしょ、指差した先には俺たちがここに来る前から部屋に置き去りにされていた誰のかわからないギターケース。

まさか、これはカツキのギターなのか？

「……ユースケ、ボーカルなの？」

ジュンタの声がして、はっとしてみんながいる方を振り返った。カツキがユースケのギターを持って、マイクスタンドの前にはユースケ。

「マサト、早く」

ジュンタの質問に、ユースケは苦笑いで答えた。カツキが俺を急かす。しょうがなくギターケースの中のシヨッキングなピンクのギ

ターを取り出した。ホント、すごい色だ。

「イイ？ いつも通り、ラークをやってくれりゃいいから、」

「え、なんでユースケなの？ ってかカヅキ弾けんの？」

シユンが驚いている。いや、俺もジユンタも驚いてるケド。

円になって、マイクを掴んだユースケ。それは、やっぱり妙だ。これはおかしい。

「ぶつつけ本番よりマシだろ？」

「まあ……ってユースケそれ本番でやるつもりだったの！」

我らがリーダーらしからぬ発言だ。そんな一歩間違ったらすべてを崩しかねないような行動。ユースケは苦笑いを浮かべるだけで答えない。

「いいから、シユン、合図」

みんなが口を噤む。いいや、とりあえず今は自分に与えられた役目だけを考えよう。俺はギターを、ジユンタはベースを、シユンはドラムを。

カヅキと目を合わせた。真っ直ぐ、真っ直ぐ向かってくる。

乾いたスティックの音が耳に入ってくる。深く息を吸い込んだ。

あとは右手が、吐き出してくれる。

c a r o m

=
E
D
=

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1351d/>

carom

2009年3月24日09時18分発行